



花影会

秋



〈花影会 今後の開催予定〉

— 第51回 春 —

令和4年4月17日(日) 13時開演

能「翁」「白鬚」片山九郎右衛門 千歳/ツレ 武田友志 地頭 浅見重好

狂言「福部の神」山本東次郎

仕舞「笠之段」分林道治

地頭 武田志房

仕舞「玉之段」味方玄

能「鷺」武田宗和 ツレ 観世恭秀 地頭 岡久広

— 第52回 秋 —

令和4年10月29日(土) 13時開演

能「俊寛」観世恭秀 地頭 松木千俊

仕舞「芭蕉」鵜澤久

地頭 武田志房

仕舞「蟬丸」山階弥次

狂言「岡太夫」大蔵彌太郎

能「正尊 起請文翔八」武田文志 地頭 観世清和

— 第53回 春 —

令和5年4月16日(日) 13時開演

能「翁」「高砂」松木千俊 地頭 武田志房

能「熊野 誂次之伝 村雨留 墨次之伝 藤行留」武田友志 地頭 武田宗和



公益財団法人

武田太加志記念能楽振興財団

Takashi Takeda memorial nohgaku foundation

解説文章 中司由起子(法政大学能楽研究所 兼任所員)

表紙写真 「花月」「砦」「紅葉狩」すべて武田志房

写真撮影 前島吉裕(表紙、P7)／前島久男(P7)

令和3年10月30日(土)

二十五世観世左近記念
観世能楽堂



番組

13:00

花

武田章志

能

月

村瀬

慧

亀井 広忠
大山 容子

一噌 隆之

三宅 近成

観世 芳伸
武田 宗和

小早川 泰輝
武田 祥照
坂井 音晴
武田 文志

狂言

佐渡狐

三宅 右近

三宅 右矩
高澤 祐介

前田 晃一

休憩 三十分

武田宗典

能

武田友志

福王 和幸
矢野 昌平

亀井 忠雄
田邊 恭資
小寺 真佐人
一噌 庸二

14:50頃

砧

三宅 右矩

上田 公威
武田 尚浩

関根 祥丸
坂井 音晴
坂井 音隆
坂口 貴信

小早川 修
岡 久広
観世 清和
浅見 重好

休憩 三十分

武田崇史

能

武田祥照

清水 義也

松木 千俊

佐川 勝貴
武田 文志

紅葉狩

森 常好

鬼揃

梅村 昌功

野口 琢弘

吉田 祐一

前田 晃一
金田 弘明

野村 昌司
観世 恭秀
山階 彌右衛門

田口 亮二
高梨 万里
木月 宣行
坂井 音雅

角 幸二郎
関根 知孝
坂井 音重
藤波 重孝

附祝言

終了予定 十八時二十分

【舞台展開】

能 ◆ 花月（かげつ）

- ① 筑紫（つくし・九州）彦山（ひこさん）の僧（ワキ）が都の清水寺を訪れます。僧の七歳の子どもは行方不明になってしまい、それを契機に出家の身となった僧は諸国を廻って修行をしていたのです。
- ② 僧は清水寺の門前の男（アイ）に声を掛け、面白く芸をする花月という少年の話を聞きます。
- ③ 男が花月を呼ぶと、花月（シテ）が現れます。花月は自らの名前の由来を述べ、天下に隠れもない花月だと名乗りを上げます。
- ④ 花月は今まで雲居寺（うんこじ）にいたが清水の花に惹かれ、さらに男と仲違いをしたくないのでやって来たと言い、男と親しげに小歌を謡います。
- ⑤ 鶯が満開の桜の花を散らします。鶯を射ようとする花月。中国の弓の名人・養由（ようゆう）の故事を用いて鶯を脅して狙いますが、仏の教え、殺生戒を思い出して弓矢を捨てました。
- ⑥ 花月は清水寺にまつわる曲舞（くせまい）を謡い舞います。内容は、坂上田村麻呂が清水寺を建立したことや、本尊の千手観音の奇跡。
- ⑦ 花月の舞を見ていた僧は、花月が我が子であると気付きます。花月は七歳の時に彦山で天狗にさらわれたと明かし、父と子は再会を果たします。
- ⑧ 男が花月に八撥（やつぱち・羯鼓）を打ちながらの舞を所望。花月は天狗に連れられていく山廻りの悲しさを謡い「羯鼓」を舞います。
- ⑨ 花月は廻った諸国の山々のことを謡い、觥（ささら・竹製の楽器の一種）を捨てると、父の僧と一緒に仏道の修行に旅立って行きました。

狂言 ◆ 佐渡狐（さどぎつね）

- ① 越後国の百姓（アド）が年貢を納めるために領主の館へ道を急いでいます。一方、佐渡の百姓（シテ）も同じく館を目指しており、二人は道連れとなって館へ向かいます。道すがら、越後の百姓が佐渡には狐がいるかどうか尋ねます。佐渡の百姓はたくさんいると答えますが、越後の百姓は信じません。そこで刀を賭けて領主の奏者（取次役）に佐渡に狐がいるか、いないかを判定してもらうことになりました。
- ② 佐渡の百姓が奏者（アド）と対面。年貢を納めた後に、実は狐を見たことがない佐渡の百姓は、奏者に賄賂を渡し、島に狐がいると答えてほしいと頼み、狐の姿や毛の色を教わります。
- ③ 佐渡の百姓と越後の百姓が揃って、奏者の前に出ます。企てのとおり、奏者は佐渡に狐がいると裁定。佐渡の百姓が賭け物の刀を取ろうとすると、越後の百姓は狐の姿形を問いたします。佐渡の百姓は奏者の助けを得て、なんとか刀を自分のものとなりました。
- ④ 奏者の前を退いた二人。納得のいかない越後の百姓が狐の鳴き声を尋ねました。切羽詰まった佐渡の百姓は、「月曜日（つきほしひ）」と鶯の鳴き声をあげてしまいます。越後の百姓は刀を奪い去って行き、佐渡の百姓はその後を追うのでした。

能 ◆ 砧（きぬた）

- ① 九州芦屋の何某（ワキ）が訴訟のための在京が三年にも及んだので、侍女の夕霧（ツレ）に今年の暮れには必ず帰郷するという知らせを妻へ伝えるように命じました。
- ② 夕霧は都から九州へ下り、芦屋の里に到着、案内を乞います。
- ③ 何某の家では、妻（前シテ）が一人寂しく暮らしていました。
- ④ 妻と夕霧の対面。妻は夕霧の都住まいをうらやみ、夫の心を信じた自らの愚かさを嘆くのでした。
- ⑤ 折しも里人の打つ砧（布を槌で打って柔らかくするための道具）の音が聞こえてきます。妻は古代中国の蘇武の故事を思い出します。敵の胡国に捕らわれた蘇武を思いやり、故郷の妻が高楼に上って砧を打ったところ、その音色が蘇武に聞こえたのです……。妻は自分も砧を打って心を慰めようとしています。
- ⑥ 妻と夕霧は砧を見つめ、物思いにふけります。
- ⑦ 妻は蘇武の故事に倣（なら）い、砧の音を風に乗せるように、夫への思慕を込めて砧を打ちます。
- ⑧ すると、妻のもとに今年の暮れも帰国できないという夫の知らせが届きます。あまりの落胆（らくたん）に妻は命を落としてしまったのでした。
- ⑨ 芦屋の何某の召使（アイ）が、これまでの経緯、妻の死と芦屋の何某の帰国について語ります。
- ⑩ 従者（ワキツレ）を伴い帰国した夫。梓弓の弦を鳴らして妻の靈魂を招き寄せる呪法をおこないます。
- ⑪ 妻の靈（後シテ）の出現。妻は、あまりに夫を思ったが故に邪淫の罪で地獄に堕ちていたのでした。地獄の炎の責め苦を受ける妻。
- ⑫ 妻の靈は夫への恋心と恨みを切々と訴えます。
- ⑬ 法華経による供養のおかげで妻はついに成仏したのでした。

能 ◆ 紅葉狩（もみじがり・おにぞろい）

- ① 作り物（舞台装置）の運び出し。紅葉の山と巖を表しています。
- ② 信濃国戸隠山は紅葉の盛り。女たち（前シテ・前ツレ）が連れ立って紅葉狩に出かけ、紅葉の木陰で休むことに。侍女（アイ）が宴の準備をします。
- ③ 狩りをしていた武将の平維茂（たいらのこれもち・ワキ）が、従者（ワキツレ）と勢子（ワキツレ）を伴い、馬で通りかかります。
- ④ 人影が見えたので、維茂は従者に様子をうかがいに行かせると、自分の高い女たちが宴を催しているとのことでした。維茂は失礼のないように馬から降りて通り過ぎようとしています。
- ⑤ 維茂は美しい女に引き止められ、宴に加わります。
- ⑥ 酒を勧められた維茂は、女たちの優雅な舞に見とれているうちに眠ってしまいました。
- ⑦ 辺りが暗くなり、空が荒れ、女たちの様子も変わっていきます。
- ⑧ 女たちは寝入っている維茂に「夢を覚ますな」と言い残し、姿を隠します。
- ⑨ 維茂の夢に八幡神に仕える武内の神（アイ）が現われます。神は、女たちが戸隠山の鬼であると維茂に告げ、太刀を授け、目を覚ますようにと声をかけ立ち去ります。
- ⑩ 維茂が起きると、稲妻が走り雷鳴が轟き、風が吹き荒れます。
- ⑪ 恐ろしい鬼たちが出現。鬼は岩の上や空から炎を放って維茂を威嚇。維茂は落ち着いて心の中で八幡神に折り立ち向かいます。激しい戦いの末、維茂は見事に鬼たちを退治したのでした。

【解説】

能◆花月（かげつ）

能に登場する花月は、どのような人物なのでしょう。舞台では「喝食（かつしき）」という年若い男の能面を用いるので、少年であることはすぐに伝わるでしょう。喝食は禅寺で食事などの世話をした稚児のことですが、能の花月は清水寺や近くの雲居寺に住まいし、人々を芸で楽しませていたようです。気になるのは「七歳の時に天狗にさらわれ、山廻（やまめぐ）りをしていた」という前半生です。天狗に連れられて、九州彦の山・四王寺（大野山）・四国の松山白峯・鳥取の大山……富士山、そして清水へ。「山廻り」にはどこか御伽草子や童話のような趣も感じられますが、舞で花月は「悲しけれ」と謡っています。「悲しけれ」の背景には、天狗を山伏とみなした場合、中世の山伏と稚児の関係も見え隠れするような気がします。しかし能では、離れ離れだった父と子がめでたく再会するという筋の中で、花月が明るい春の日、満開の桜の下で次々と中世に流行した芸能を披露していくのが眼目です。

花月は、自分の名前の由来を『月』は永遠に常に存在するものであり、「か」の字は四季に応じて《花・瓜・菓・火》という同じ音の風物に当てはまり、そのうえ「因果」の《果》でもある」と披露します。大仰な自己紹介ですが、それによって花月という少年の登場を印象付ける効果があります。鶯を弓矢で狙う場面でも自分を中国の弓の名人 養由（ようゆう）に対比させています。こういった名乗りや自分アピールは、すでにそれ自体が言葉の面白さを見せる芸ともいえます。

花月は門前の男と「恋はくせ者」という小歌（こうた）を謡います。小歌は中世の流行歌謡で、能では独特の複雑めでたく帰国するという、ほぼ一定の展開になっています。《佐渡狐》も百姓物の一つで、前半はこの流れに当てはまりますが、途中から独自の展開を見せていきます。《佐渡狐》は、右の流れに「佐渡に狐がいるか、いないか」という話と、「袖の下」いわゆる賄賂の要素を加えている点が特色です。新潟県の佐渡島は豊かな自然に恵まれた島ですが、なぜか佐渡に狐はいないという俗説が江戸時代に広まっていたようです。例えば辞書『俚言集覧（りげんしゅうらん）』では佐渡に「貉（むじな）の外には獣なし。鼠だにあずと或人いへり。地千里ならざれば虎を生せず、地百里ならざれば狐を生せずといふ」南町奉行を務めた根岸鎮衛（しずもり）の雑話集『耳袋』には「諺にいふ三郡（佐渡の三つの地域）に狐なしと伝へし通り、佐渡の国には狐なき由」と見えます。佐渡の昔話には、貉または寺の住職が狐をだました結果、島から狐がいなくなったという話も伝わります。

狂言の台本は江戸時代の初期頃から本格的に書き留められるようになりましたが、実は江戸初期の台本には《佐渡狐》は収められておらず、本曲は江戸時代中期になって成立したと考えられています。百姓物の展開を踏まえつつも、そこに前述した狐のことや賄賂の話といった江戸時代らしさを盛り込んでいるのも、こういった時代性によると思われる。佐渡の百姓の頑なな行動には、間違いを認めたくない、弱いところを見せたくないというような、誰しもが持ちうる思いがうかがえます。また最初はこのそりと渡される「袖の下」を渋い顔で断った奏者は、結局は受け取ってしまいます。人間味溢れる人物たちが登場しています。せっかく狐のことを教わったのにあやふやな佐渡の百姓や、それを見て慌てる奏者、割って入ろうとする越後の百姓と、三人三様の行動が笑いを誘います。

な拍子当たりで謡われます。《花月》の小歌は「さら」の音が豊かに響き、門前の男との関係を疑いたくなるような艶っぽい雰囲気漂います。そして小歌から秀逸な流れで鶯を弓矢で狙う場面に繋がります。この場面は言葉の芸ともモノマネの一つともいえるでしょう。小弓（こゆみ）は、中世には春の子どもの遊びとして考えられていたとの指摘もあり、まさに春を舞台にした能にふさわしい芸です。

さらに、清水寺の物語を語り舞う曲舞（くせまい）と八撥（やつぱち・羯鼓舞）。「羯鼓」は腰に付けた羯鼓を撥で打ちながら舞います。独特の旋律や拍子に合わせた軽快な足拍子が、見る者の心を浮き立てていきます。最後は「山廻り（やまめぐり）」の舞です。「山廻り」で花月は「鼈（さ）さら」という楽器（茶筌のように竹を細く束ねて、棒で摺る）を使っていたことがわかります。舞台では撥を鼈に見立てて所作をしますが、鼈も羯鼓も中世に非常に流行した芸能でした。世阿弥が能の作り方を記した『三道（さんどう）』には、「放下（ほうか）には自然居士（じねんこじ）・花月・東岸居士・西岸居士などの遊狂」と見えます。「放下」は半分僧半分俗人といった存在で、出家ながらも髪を剃ったりはせず、説法や芸能をおこないました。この放下の芸のシンボルのようなのが、鼈や羯鼓です。まさに《花月》は中世の息吹を伝える作品なのです。

狂言◆佐渡狐（さどぎつね）

狂言には、めでたさが主題の脇狂言という作品群があり、その中には百姓物と呼ばれる曲が含まれています。百姓物は、地方の百姓が年貢を納めるために都に上り、奏者（そうしゃ・取次役）に年貢を納め、自分たちの国や年貢の品などを読み込んだ和歌を詠んだり、年貢の品の謂れを語ったりして歌舞を見せ、その褒美として雑税を免除されて、

能◆砧（きぬた）

世阿弥の語った言葉を息子の観世元能（もとよし）が書き留めた『申楽談儀（さるがくだんぎ）』には、《砧》について有名な記事があります。

静かなりし夜、砧の能の節（ふし）を聞きしに、か
よしの能の味わいは、末の世に知る人有まじければ、
書き置くも物くさき由、物語せられし也。しかれば、
無上無味のみなる所は、味わうべきことならず。

この記事からは、《砧》が世阿弥の作であることがわかると同時に、今の世では価値をわかってもらえないだろうという世阿弥の嘆きも伝わります。《砧》を「無上無味」という味わいを越えた無上の妙味と世阿弥自ら評価しているのも興味深い点です。

世阿弥の次世代には、甥の音阿弥（おんあみ）による《砧》の演能と、女婿の金春禅竹が《砧》に言及した伝書記事は確認できるのですが、室町時代中期から江戸時代初期にかけては《砧》の上演記録が残っていません。《砧》には上演が途絶えた時期があったのです。ただし謡い物として享受されており、珍しい能を好んでいた五代將軍徳川綱吉の時代になって、能として再興されました。以来、習いの能として大切にされている大曲です。

妻が夫を想って打つ砧の場面には、砧にまつわる漢詩が数多く引かれています。その中心が中国の『漢書（かんじょ）』『蘇武伝（そぶでん）』の話です。これが日本に伝わり、漢詩や『平家物語』の挿話、及び『和漢朗詠集』の注釈などを通して知られていきます。《砧》の妻は蘇武の妻のように高樓の上で砧は打ちませんが、その代わりに《砧》では「風」に砧の音を乗せて届けることが強調されます。こ

《花影会 第50回へのあゆみ》

志房・友志・文志主催 平成11年～										志房主催 昭和60年～										太加志主催 昭和54年～																																																																																																																																																			
第33回	土蜘蛛	志房	第32回	野宮	文志	道成寺	志房	松風	友志	岡久広・友志	第31回	仲光	志房	唐船（盤渉）	志房	第30回	松浦佐用姫	文志	望月	文志	芭蕉	志房	国栖	志房	隅田川	友志	鉢木	志房	井筒	友志	鞍馬天狗	文志	絵馬	志房	山姥	文志	花筐（筐之伝・大返）	志房	第25回	撰待	志房	第24回	弱法師	友志	船弁慶（重手前後之替）	友志	半節（立花供養）	志房	石橋（大獅子）	観世清和・宗典	第23回	卒都婆小町（一度之次第）	志房	安宅（勸進帳・滝流）	松木千俊	第22回	道成寺	文志	三輪（白式神楽）	宗和	紅葉狩	文志	大原御幸	志房	求塚	志房	屋島	友志	松風（戯之舞）	志房	自然居士	文志	道成寺	友志	木曾（願書）	志房	熊坂（替之形）	志房	井筒	文志	夜討曾我（十番斬・大藤内）	友志・文志	第15回	隅田川	志房	葵上	志房	景清（松門之出・小返之伝）	志房	三輪（白式神楽）	志房	弱法師	文志	鶺鴒小町	志房	邯鄲	友志	砧	志房	賀茂	文志	安宅（勸進帳）	志房	高砂	友志	殺生石	友志	草子洗小町	志房	田村	文志	第9回	船弁慶（重手前後之替）	志房	花月	文志	第8回	求塚	志房	道成寺	小島一英	観世清和	志房	清経（替之形）	志房	道成寺	宗和	井筒	太加志	弱法師（盲目之舞）	太加志	安宅（勸進帳・滝流）	志房	草子洗小町（替装束）	観世元正	鶴亀	太加志	第5回	翁	宗和	遊行柳（青柳之舞）	太加志	合浦	友志	第4回	道成寺	宗和	葵上（样之出・空之祈）	志房	第2回	関寺小町	太加志	仲光（愁傷之舞）	太加志	第3回	羽衣（彩色之伝）	観世元正	乱	小川博久	志房・宗和	辛都婆小町	郷郭太郎	融（思立之出・酌之舞）	太加志	第1回	小袖曾我	志房・宗和

れも漢詩を踏まえているのですが、「松の声・松風・秋風・山風・嵐・風の気色・夜嵐」とさまざまな「風」が繰り返し表現されます。そして風に乘った砧の音は、秋の虫の音と妻の涙と混然となって「ほろほろ、はらはらはら」の響きに集約されていきます。悲しくもしみじみとした名場面です。

後半に妻は地獄に堕ちた亡者として現れます。地獄では、鬼から砧を打つように責められても叫び声も出ず、砧の音も松風も聞こえず、ただ鬼の責めさいなむ声がするだけと妻は訴えます。さらには火焰にも責められる非常に凄惨な地獄です。「恐ろしや」と崩れ落ちる妻の姿に心を揺さぶられます。

一方で、妻の霊は夫への怨みを切々と述べていきます。この場面にも蘆武の妻の話が引用されており、妻の霊は自分の打った砧の音を聞いてくれなかったのかと夫を責めます。世阿弥は夢幻能の形式を確立し、霊が過去を振り返る能を数多く作りました。〈砧〉も前半に妻の霊の化身が登場し、砧を打った過去を昔物語として語るといふ夢幻能に作ることもできそうです。しかし妻の絶望、怨み、悲しみは昔物語とするには激しく強すぎる感情だったのではないのでしょうか。それを鎮めるために、世阿弥は夫が立ち会っておこなわれる妻の招魂の場を設定して、法華経によって砧の声が「菩提の種」となる救済の結末を用意したのかもかもしれません。

能◆紅葉狩 鬼揃（もみじがり・おにぞろい）

美しく優しげな女が実は鬼だった……。恐ろしい鬼がいきなり現れて、武将と戦うのではなく、美女に化けた鬼が武将を誘惑したうえで襲うという展開に面白さがあります。その趣向の中心が美女の舞です。最初は美しく優雅に、次第にどこか妖しい雰囲気が漂う舞。やがて武将の平維茂

「ワキ」が眠りに落ちてしまうと、天候が急変……。というように劇的に出来事が展開していきます。ほかにも工夫があります。多くの能ではどこが物語の舞台なのか、最初にはっきりと示されるのが普通ですが、〈紅葉狩〉では維茂の前に武内の「アイ」が現れる、間狂言の場面になって初めて舞台が戸隠山であることがわかります。間狂言の役割が非常に大切な作品です。このような劇的な展開に加えて作り物の紅葉の山が出され、ワキが活躍し、多くの人物が登場する華やかな印象の能です。こういった作品の特徴は、室町時代後期に活躍した観世信光（のぶみつ）の作品によく見受けられます。信光は本曲をはじめ〈船弁慶〉の作者としても知られています。

〈紅葉狩〉のテーマカラーは紅（くれない）と言えるかもしれません。色づいた紅葉。そして「林間に酒を煖（あたた）めて紅葉（こうよう）を焼（た）くとかや」という『和漢朗詠集』の漢詩を引いて詠われる酒と紅葉のイメージや、紅葉に照らされるような美女の顔ばせの描写。紅に染まる誘惑の場面です。後半になると、そこに鬼たちが放ち降らす「雷火・火焰・炎」の紅が現れます。〈紅葉狩〉の紅には艶やかな美だけでなく、どこか禍々しさも含まれているようです。

平維茂は平安時代中期の武将で、武勇に優れた信仰心の篤い人物だったようです。維茂は信濃守に任じられたことがありました。さらに、人々を苦しめる戸隠山の鬼を勅命によって維茂が退治したという伝承があり、それが〈紅葉狩〉の素材となっていることが指摘されています。のちに〈紅葉狩〉の話は、絵巻物や歌舞伎舞踊などにも展開していきました。

本日は小書（特別演出）「鬼揃」での上演です。その名のとおり、前半で登場した侍女たちも後半に鬼となって再び現れます。前半の酒宴の場面では侍女たちが「相舞（あいまい）二人で舞うこと」をしたり、酌をしたり、全員で維茂を誘惑します。華やかさと恐ろしさが倍増する演出です。

〈参考文献〉

『花月』 宮本圭造「羯鼓舞の系譜―「自然居士」に羯鼓舞はあったか―」（『鏡仙』六一）・伊海孝充「花月の「小弓」をめぐる―」（『日本文学試要』七三） 『佐渡狐』 北川忠彦「佐渡狐」（『鑑賞日本古典文学 謡曲・狂言』角川書店） 橋本朝生「佐渡狐」の形成と展開（『狂言の形成と展開』みづき書房） 『砧』 表章「砧の能の中絶と再興」（『観世』四六一〇） 『紅葉狩』 宮本圭造「紅葉狩」の素材―信光の談話をめぐって―」（『金剛』一六〇）

〈解説文章〉

中司由起子

法政大学能楽研究所兼任所員



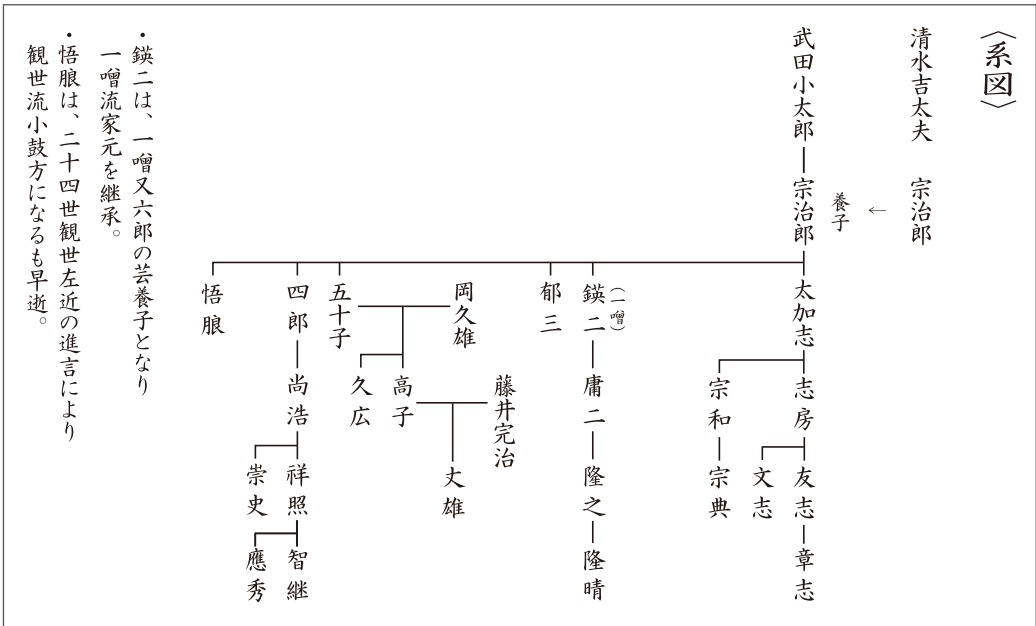
太加志（第1回花影会「融」昭和54年10月14日）



志房・宗和（第1回花影会「小袖曾我」昭和54年10月14日）



友志（第47回「鶴亀」令和3年5月30日） 宗典（第49回「翁」令和3年4月18日）



《前ページからの続き》

武田太加志記念能楽振興財団主催 平成28年～										志房・友志・文志主催 平成11年～																																					
第47回	弱法師	佐川勝貴	第49回	翁・弓八幡	宗典	第48回	卒都婆小町（一度之次第）	志房	第46回	景清	大槻文藏	第45回	翁・嵐山（白頭）	宗和	第44回	望月	志房	第43回	翁・淡路	文志	第42回	関寺小町	志房	第41回	山姥	友志	第40回	隅田川	志房	第39回	朝長	文志	第38回	敦盛	文志	第37回	七騎落（憑之舞）	志房	第36回	合浦	章志	第35回	三井寺（無俳之伝）	志房	第34回	采女	友志
	翁・鶴亀		二人静		松木千俊・文志				三井寺	浅見真州		蟬丸（替之型）	香川靖嗣・志房					石橋（師資十二段之式）	友志・宗典					楠露	章志				春宗	文志				千手（罪曲之舞）	志房・宗和		草子洗小町	志房	安宅（勸進帳）		正尊（起請文・翔入）						

※敬称略。武田姓は省略し名前のみ掲載